



Randomized double-blind comparison of the effects of intramyometrial and intravenous oxytocin during elective cesarean section

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2018-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋永, 智永子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3226

論文審査の結果の要旨

オキシトシンは子宮筋肉内に投与することにより、投与局所だけでなく陣痛時のように子宮全体に拡散する収縮が得られると期待されている。帝王切開術では迅速な子宮収縮による止血促進の目的で使用されるが、循環動態への影響も懸念されている。申請者は子宮筋肉内(IMY)投与では静脈内(IV)投与と同等の子宮収縮効果を示すものの血行動態への影響は小さいとの仮説を立て、無作為二重盲検比較試験で検証した。対象は浜松医科大学付属病院で妊娠 36 週以降の予定帝王切開術を受ける単胎妊娠症例とした。説明後の同意取得後無作為に 2 群（各 20 例）に分け、脊髄くも膜下麻酔下で児娩出臍帯クランプ直後に、オキシトシン 0.07 IU/kg を IMY または IV 投与した。収縮期血圧(SBP)、心拍数、術中出血量、子宮筋緊張度（薬剤投与から 2、4、6、8、10、15、20 分後に、産科医が 10 点満点で評価）、副作用（嘔気、嘔吐、顔面紅潮、頭痛）の頻度、術後 24 時間以内の追加子宮収縮薬投与の有無を比較した。その結果、両群とも各 4 名が低血圧（入院時の SBP の 80%以下）を示したが、IMY 群ですべて投与 5 分以降に低下したのに対し IV 群ではいずれも 5 分以内であった。また IV 群は投与後 1-2 分で心拍数の上昇、2-4 分後に SBP の低下を示し、投与 3 分後の SBP は IV 群が IMY 群より有意に低値を示した（ 92.6 ± 8.5 vs. 100.9 ± 8.0 mmHg; $p=0.003$ ）。最大子宮筋緊張度を得るのに要する時間は、IV 群で 2 分、IMY 群で 10 分であった。術中出血量、副作用の頻度、追加子宮収縮薬投与の有無に群間差を認めなかった。これより申請者は、オキシトシン IMY 投与は循環系への影響は小さく子宮収縮強度は IV 投与と同等であるものの、効果発現が遅く児娩出後の速やかな子宮収縮を得ることは困難であると結論づけた。審査委員会では、申請者が初めて両群間の効果及び副作用を定量的に検証し、臨床応用につながる結果を得た点を高く評価した。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 浦野 哲盟

副査 川上 純一

副査 杉原 一廣